

# J. London, *Before Adam*

——人類の曙の時代の物語——

辻井 榮 滋

## I

人類の曙の頃、われわれの祖先はいったい何を思い、どんな生活を送っていたのだろうか？ こんな素朴な疑問を口ずさみながら、時間に追いまわされる超多忙な私たち現代人も、時として自分たちの祖先に思いを馳せることがある。たとえば、『人類創世』や『猿の惑星』といった原始ないしそれに類する社会を扱った数々の映画、あるいは今も続々と発掘が行なわれ、そのたびに話題を提供する古代遺跡、新しいところでは1991年にアルプスで発見されて大ニュースとなった5千年前のミイラ、1992年のコロンブス500年祭、さらには建都1200年で各種イベントが目白押しだった1994年の京都などは、その代表例であろう。中身や程度に差はあれ、いずれも遠い祖先に寄せる思いという点では一致する。1982年の『人類創世』の場合は、「いまから8万年前の先史時代を舞台に、人類の祖先がどのようにして火を持ち得、そして感情表現ができるようになったか」<sup>1)</sup>（傍点筆者）を扱った映画であったが、本稿ではさらにこれよりも遡って、人類がいわゆる「人間になっていく時代」<sup>2)</sup>をジャック・ロンドン（1876—1916）が想像力豊かに描きだした *Before Adam*（1907）を取りあげる。

人類登場500万年とも200万年とも言われるが、

……いま我々がみているアンドロメダの光は我々の祖先である猿人が、地上をうろついていた230万年前に発せられたものなのである、と改めていわれてしまうと、宇宙人とのコンタクトへの夢もくそも、はるか5万光年のかなたに飛んで消えていってしまう……<sup>3)</sup>。

そんな世界にまでタイム・スリップするのである。ロンドン自身の言葉では、the Mid-Pleistocene (p. 1), すなわち「洪積世〔大氷河時代にあたる、約200万年前から約1万年前までの頃〕中期」(pp. 9-10)の時代である。別名「更新世」とも呼ばれ、「新世代第4紀の前期；約200万年前から1万年前まで；氷河の発達と人類の出現が特徴」<sup>4)</sup>と言われる。また、「人類発生から約2百万年（この数字は大きく変動する可能性はあるが）が経過している」<sup>5)</sup>との記述も見られるが、いずれにせよ想像を絶する時空を遡るわけである。

*Before Adam* は、文字通りには『アダム以前』である。ロンドンは作品の題名の付け方では定評があるが、<sup>6)</sup>それにしてもこの題はかなり刺激的で、出版当時にとっては特に挑戦的な響きす

ら持ったように思われる。アダムは周知の通り、『旧約聖書』の「はじめに神は天と地とを創造された」に始まる「創世紀」の冒頭で神が最初に造った男の名前であり、人類の祖とされる。現在ならともかく、

Written in 1906 when Darwin's theories were more inflammatory and controversial than they are today, BEFORE ADAM was probably looked upon as radical and dangerous by several of its readers.<sup>7)</sup>

の指摘の通り、ダーウィンの進化論が今日よりはるかに扇動的で物議をかもした当時（1900年代）にあっては、「アダム以前」という表現自体がキリスト教体制に敢然と反旗を翻すなり刃を突きつけるものと見なされたことであろう。科学的であろうとして、

…… London did indeed agree with Charles Darwin's concept of the development of man and did not believe in a supreme being or "God."<sup>8)</sup>

の立場を鮮明にしたわけだから。当時の時代思潮はのちに見るとして、やがてはあの G. オーウェルによっても

But read, if you can get hold of them, *The Valley of the Moon*, *When God Laughs*, *The Road*, *The Jacket*, *The Iron Heel*, and *Before Adam*. If you read those six books, you've read the best of Jack London.<sup>9)</sup>

と、ロンドンが残した作品でベスト6の中に数えられることになるし、さらには

one of the best science-fiction novels ever written and will doubtlessly remain a classic of the genre. Issac Asimov, the noted scientist and prolific science-fiction writer, has rightly called this novel a masterpiece.<sup>10)</sup>

といった高い評価をも得るようになる。そこで、間違いなく単純素朴きわまりなかったものと想定される原始社会の有りようを、生き生きと克明に描いてみせた *Before Adam* の魅力に探りを入れてみたいと思う。

## II

*Before Adam* が書かれたのは1906年、ロンドン30歳の時である。前年の3月にはオークランド市長選に再度立候補、4月にはグレン・エレンへ移住、6月にはヒル農園購入合意、夏には「スナーク」号建造計画をスタートさせ、10月には中西部と東部への講演旅行（翌年1月まで）、11月には妻ベシィから出されていた離婚請求が認められるや、その翌日（11月19日）にはチャミアンと正式結婚、1906年2月半ばにグレン・エレンに帰り、4月18日にはサンフランシスコの

大地震……と、まさに息つく間もない多忙且つセンセーショナルな日々を送っていた。執筆活動もきわめて旺盛で、*The Game, Tales of the Fish Patrol, White Fang* といった単行本をはじめ、いくつも短篇を発表していったのもこの頃のことである。農園購入にせよ「スナーク」号建造にせよ、莫大な出費を要したことが多作につながったことは明らかであり、各作品の出来映えはともかく、上記の3作だけを見ても、ロンドン文学を知るうえで外すことのできない作品ではあろう。

さて、*Before Adam* はそうした状況下で1906年6月7日に脱稿された。わずか40日で書かれたという。本人がC. F. Lowrie という *Before Adam* の劇化を試みた同時代の社会主義者に宛てた書簡にも、

Here is the chronology of *Before Adam*: It was finished June 7, 1906. It was written in forty (40) days. It was accepted by *Everybody's*, by telegram July 19, 1906. Its publication began in the October Number of *Everybody's*, 1906.

と書いている（ただ、多少気になるのは、40日かかって6月7日脱稿だとすれば、4月29日に書き始めたことになるはずだが、ラス・キングマンによると、<sup>12)</sup> “Apr 25 Has finished one third of *Before Adam*.” とも記載している点である。さらには、“Apr 30 Working on *Before Adam*.” とも記載している）。6月9日にはマクミラン社へ発送し、同社のジョージ・P・ブレットも絶賛したようである。

In the letter of June 19, Brett praised *Before Adam*, claiming it was “a wonderful recreation of the times of which it treats and shows …… more strongly than anything else the truth of my belief in the greatness of your imagination and power to delineate things of which other people can only make vague surmises.” However, he maintained that *Before Adam* would probably not have as large a sale as some of JL’s other books. He felt that the story would not appeal to present-day readers, since they were not interested in “the science or psychology of the situation” in the novel.<sup>13)</sup>

但し、彼の売れ行きの予想となると厳しく、さらには、ロンドンに宛てた親友のG. スターリングの書簡（1906年7月7日付）評も芳しくはなかった。

As to *Before Adam*, I think it’s the poorest thing you’ve done, but that comment is not necessarily blame. However, it is blame.<sup>14)</sup> ……

これらを重ね合わせると、当時の読者の傾向と限界が垣間見えてくる。

7月19日には *Everybody's Magazine* という雑誌が *Before Adam* の連載を電報で受諾し、同年10月号から翌1907年2月号まで5回にわたって連載した。筆者の手もとに同誌の10月号の表紙のコピーがあるので、参考までに80%に縮小してお目にかけてたい（実物は、25×17.5 cm である）。猿ないし猿人ないし原人らしき足跡が4個描かれ、シンプルだがインパクトの強い表紙になっている。連載の最終月と重なって、単行本がマクミラン社より出版された。こちら、足跡を使用した点では同じ（但し、表紙に5個、背表紙にも1個）である。初版の部数は、20,080であった（こ



の数字は、その前後の *Scorn of Women* (1906年11月—920部)、*Love of Life* (1907年9月—7,973部) と比べると決して少なくはない。1906年10月の *White Fang* は48,195部、1907年11月の *The Road* は5,360部であった)。

ちなみに、上に垣間見た時代思潮をもう少し肉付けしておきたい。まずは、高名な伝記作家アーヴィング・ストーン<sup>15)</sup>の解説に耳を傾けてみよう。

組織化されている宗教団体が、進化論などというものは、不敬神者どものでっち上げた悪魔的な作り話だと断定し、排撃していた暗黒時代に、しかもそうした儀式的な独断論の石壁に対する科学的研究の突撃がまだ大して効果をあげていなかった頃に、構築されたものだけに、『アダム以前』は、ダーウィンやウォレスの理論を大衆化し、彼らの著作の意義が理解しやすいように、人類の祖先の生活を描いてみせようとした大胆な試みだった<sup>15)</sup>。

現在から見ると、容易には信じがたい時代思潮であったことを踏まえてかからねばならない。1962年版の *Before Adam* (マクミラン社刊) に“Jack London, the Man and His Work” と題して13ページもの長い序文を寄せた Willy Ley も、

In those days the concept of evolution was still considered dangerous material by many writers and editors in the United States and usually labeled the “theory of evolution,” providing a safe literary distance in case someone should complain. (xvi)

と述べ、続けて当時の書評もいくつか紹介している。そのうちの2つを取りあげてみよう。

Frederic Taber Cooper, reviewer of *The Bookman*, wrote: “It may be the result of a good deal of scientific research into the latest accepted theories of evolution and atavism, but the popularity of a work of fiction is seldom in direct ratio to its scientific accuracy.” (xvii)

A modern reader is most likely to agree with what the *New York Times* said: “Jack Londbon has performed a wonderful feat in so describing the lives and passions of these rudimentary beings. He has builded a romance of the unknown ages, of the creatures that may have been, and endowed it all with poignant reality. (xvii)

前者のほうがやや辛口批評の部類に属し、取りあげなかった他の批評も、真実に迫ろうとして科学的になりすぎ、いわゆる小説としての感動的側面に欠ける点を指摘している。もっとも、後者の場合などは、現在の読者にも同意できる評であるだろうし、当時であっても、

イエール大学の A・J・ケラー教授は、「『アダム以前』は、原人の構想面があらゆる主要点で正確かつ科学的である」と述べ、さっそく彼の人類学のクラスの教科書としてこれを使用した<sup>16)</sup>。

という。

以上見てきたように、進化論を軽々には認めようとしないう風潮と、ロンドンが真実を尊び科学

的になろうとしたことが、*Before Adam*の受容、すなわち大きな俗受けには至らなかった要因である。同じことが後続の*The Road*についても言えるわけで、両作ともに一般読者層とは乖離しすぎた素材であった。

さらに時代が下ってくると、しかしながら、そうした様相も変わってくる。同じ1962年版にWilly Leyとともに結びの筆を執ったペンシルヴェイニア大学教授Loren Eiseleyは、

…… it is my belief that no writer has since produced so moving and vivid a picture of man's primordial past as has Jack London.

As a half-grown boy I reveled in the book, opening as it did vast vistas of the human past with which I was unfamiliar. Reading it today as a professional anthropologist, I find that none of that old thrill has departed. (p. 147)

と、専門の人類学者としての立場から読んでも、人類の未開の過去の情景をこれほど感動的且つ生き生きと描いた作家はロンドンをおいてほかにない、と賞賛している。さらに付け加えれば、

As a historian of science I could say it presents a vivid picture of anthropological thinking around the turn of the century, … (p. 152)

と、20世紀初頭の人類的思考の有りようを見事に描いている、と述べてる。

*Before Adam*をめぐる、その時代背景や成立事情を整理してきたが、この作品が当時厄介な問題——plagiarism、すなわち剽窃——を巻き起こしたことにも付言しておかねばならない。アメリカ作家Stanley Waterloo (1846-1913)の*The Story of Ab: A Story of the Time of the Cave Men* (1897)に絡むものである。ロンドンとウォーターラーその他の関係者たちの間で交わされた書簡が幾通も残っているので、それらを総合してみると、ウォーターラーの言い分は

“I am not personally acquainted with Mr. London. But I am convinced that he is a clever writer when he uses other people's brains. He has accomplished in six weeks what it took me fifteen years of deep study and investigation to produce. *The Story of Ab* was my pet, and I worked on it for fifteen long years. Jack London not only starts out with the same proposition I based my work on, but he employs<sup>17)</sup> in some instances practically the same language.

というものであり、これに対するロンドンの反論は、

…… I wrote *Before Adam* as a reply to the *Story of Ab*, because I considered the latter unscientific. Mr. Waterloo crowded the social evolution of a thousand generations into one generation. The whole point of *Before Adam*, on the other hand, is to demonstrate the excessive slowness of social evolution<sup>18)</sup> in the primitive world.

というものであった。本稿の目的はこの両作品を比較検討することではないので、筆者の先達中田幸子氏の見方を参考までに引いておく。

# 前以ムダア

ンドンロクツヤマジ

譯郎三彦春篠

版堂陽洛

## は し が き

原始人の暖かい友情、原始人の熱烈な戀、滑稽盡くしの日常生活、喧噪を極めた奇怪な會議、夫れから又彼等の賑やかな遊戯、種々な冒險、と言つたやうな原始人の、野性的生活状態を、極めて細かに、極めて科學的に、そして頗る鮮やかに描寫してゐるのが、此の「アダム以前」である。著者チャックロンドンの名は、また我國には餘り紹介せられてゐないやうであるが、彼れは現代米國で、第一流の作家として、英語文壇に特異な地位を占めてゐる、極めて獨創的な、極めて豊かな詩才を持つた、詩人肌の作家である。彼れは一面から

I

言つて、頗る平民主義な人で、そして總て虚飾虚禮、煩瑣なことの非常に嫌ひな、天眞な無邪氣な自然兒の感美者であるらしい。此の虚飾嫌ひな人、煩瑣なこと嫌ひな人、伸んびりして天眞爛熳なところの好きな人としての彼れの代表的作物が、此の、「アダム以前」である。で如何にも滑澤な輕快な味ひを多分に含んでゐて、怎んな嚴肅な人でも、間斷なき微笑を漏らさないでは、讀んでゆけないやうな作であるに拘はらず、決して笑はせる丈に止つて、他に何んにも含んでゐない作ではない。嫌味のない生活、淡白な生活、凡ての陰謀、于策と言つたやうなものもない暢氣な生活、飾りつ氣抜きの生活、悠々云々原始人の生活が如何にも心持良く展開され、種

2

々な意味で窮屈な現代人を、悠つくりした廣闊な、夫れで單調でない、面白味の豊かな奇怪な世界に連れ込んで行く。私は澤山の面白い繪を見せて呉れて、頗る巧妙に何かを暗示してゐる、肩の凝らずに面白い、夫れで一面種々な教訓と暗示とを興へる作だと思つて評したのである。

3

評者誌す

## アダム以前

ヂヤック・ロンドン作

篠崎彦三郎譯

## 一

1

繪 〓 繪 〓 繪 〓 數 限 り も な い 繪 〓

私は摩遜山の繪が何であるか、解るまでは、私の夢の裡にひらがり遣入つて来る夫等の數へ切れぬ繪が、何處から來てゐるものかと、屢々不審でならなかつた。と云ふのは私の夢に遣入つてくる夫等の繪と云ふのが皆んな、醒めた

現の生活で見たことのないやうなものの許りだつたからだ。是等の繪は、私の夢をまるで惡夢の行列見たいなものにしてつて、私の小兒時代を甚く悩やまし苦しめた。そして後には私は自分自身が普通と異つた、不自然な、呪はれた人間であるやうに思ひ込むことになつた。

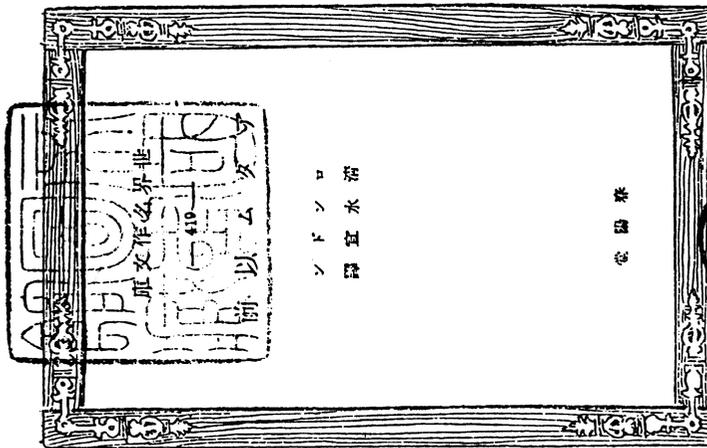
樂しむと云ふ樂しみは、私には唯畫圖式しか味はへなかつたので、私の夜は全く恐怖の世界だつた。夫れもあの奇しき恐怖 〓 私には敢えて言ふが、私と同じく地球面を歩いてゐる人で、私の遭遇したやうな彼種類の恐怖と後程の甚い恐怖とに出遇つた人はゐない。何故なら私の恐怖は、往古の恐怖で、夫れは有史以前の世帯、夫れもその初代の頃に勢を逞しうしてゐた恐怖だつたからだ。一口に言ふと私の恐怖と云ふのは中間人間時代と言はれる頃の恐怖だつたのだ。

2

私は全體向前を語つてゐるんだらう。成程私の夢の實體を結ぶ以前に、説明が  
 必要なんだ。でないと私には能く解つてゐる事なんだが、此の私には能く解つ  
 てゐる事柄が、隣君には何んの事だか解らないだらう。  
 私が信じて此物語を書いてゐると中間人間世界の存在物や出来事が、夥し  
 い幻影となつて私の眼先に浮んで来る。併かも私は未等のものが他の人々には  
 全然無稽なものである事を知つてゐる。垂耳の友附、早足の温かい誘惑、赤眼  
 の色慾、隔世遺傳などが今日の人々に何んであらう？ 唯夫れは昔んなの人に  
 は念慮っぽい矛盾腫着に過ぎない。又火人、樹人の行爲や、未等太古民群の喋  
 喋と鋭舌る會談だつて昔んな、今日の人々になんでもない不可解な馬鹿氣な矛  
 盾に過ぎない。何故なら今の世の人は滑しい岩窟中の平和と、穴居民の黄昏の  
 酒宴とを知らないからだ。今の世の人々は誰も樹上で朔風を咬み、若い樹皮の

3

113



ロ  
 シ  
 ン  
 水  
 活  
 印  
 機

電 録 奉



630-1

譯者序

今かの、フロイドの精神分析が、いかに文學の上に一つの大きな影響を及ぼしたが——ヤーム・ジョイスの「モリス」エ・マルセル・アウグストの「過ぎし日の時を求めて」などが、極めて大きく文學の新領域として問題にされてゐる時、それを最も真摯的に、しかも恐らくフロイドの理論を殆んど知らずに、それを最も完全に力強く生かした、此の原始時代の回想——人間の無意識の中に沈黙・著された原始の體驗、それを「白日夢」として、多様な藝術的幻象の中に再現したロンドンを今更に認識して、その再鑑賞・再評價を實に必要とするのを感ずる。

が、それ以上に問題になるのは、彼が未分に唯物辯證法を把握し、それを藝術的に表現したことである。尤も、彼が、既に既成主義的傾向のもとに、幾多の小説をものしたことは、當然に、その辯證法的唯物論の理解あるべきを希すものではあるが、併し、それを唯物論的に、かの、エンゲルスの「原始社會」の如く、明確に、この時代を捕致したことは全く、彼の卓越性を今日以後の新しい課題としてお

譯 へねばならない。

者 彼こそ、純粋文學の上よりも、また、プロレタリア文學の面よりも、また更に廣く一般大衆文學の部  
序 からも、更に研究するべき仕事を爲した未來の作家であらう。

譯 既に「クエート」に於ては、彼の才能も判行され、またホチャロフの唯物史觀世界史の中にも、この  
者 「ロンドン」が、優秀資料として問題にされてゐることは、いかにも尤も思惟するのである。

序 終りに一言する——彼ジャク・ロントンは、一齣の典型的近代人である。しかもまた奈だ自然のアメリカの泰西性を遺傳する者位を深く感してゐる。ここにこの都るべき機械文明の中に立つて、かの誰かなら始時代に無風のノスタルジヤ的懷想を懐くと同時に、また明確な近代科學の具體的探求を試みるのだ。ここに始めて心理分析と唯物辯證法は、最も詩的な藝術的表現を獲得することが出来た。

われわれはロントンの仕事を一つの有意義な礎石として、次の進路を必然に豫感しつつこの序を終りたい。

一九三三・一〇・一



「私には斯んなによく解つて居る事柄の意味も、諸君にはさっぱり解らない事になるだらう。私が之を得く時には、あの別な世界のあらゆる生き物や事件が、私の前に混沌たる幻影となつて消き立つて来るのだけれど、然も私は知つて居るが——諸君に就つては斯うしたものは斯んな調子で外れた理窟に合はぬ事なのだらう。

諸君にとつてどうなのだらうか?——「聾耳」と交響になつたり、「超自然」の劇的な露露や、「赤眼」の肉慾と神道傳などは?——こんな事を言つたところで、みんな空騒ぎな話だし、それ以外の何物でもありません。そして又之も同じく逆説も何も無い話だに過ぎないだらうが——あの「交響」と「超自然」の途中の仕度や、何やらちやくちやと譯の解らぬ事を嘆く者も云々誰の會話なども——なぜと云つて諸君は、あの纏綿の中の、この洞の平和も知らなければ、一日の終りのまるごちの水除ふ地のサーカスも知らないのだから。諸君は樹のてつてんで朝の風を嗅げな事なんぞ無いのだし、又空の樹の皮がどんなに甘いものだが諸君の口で味つた事もあるまい。

その方がいふのだと私は斷言するのだが——諸君も、私の幼年期を通じて、私がやつたやうに之と近附きになつて見るといふ。一人の少年としては私も全く他の子供と同じであつたのだ——少くとも私の目の覺めて居る時間だけは。私の遠つて居たのは私が眠つて居る間だけであつた。私の最も初期の眠り出からすれば、私の眠つて居る間と云ふのは一個の恐怖の期間であつた。それには私の夢にも一抹の幸

が、朝に覺つて居るよりも、むしろ怖ろしいものであつた。それは、私の眠つて居る間の生活の中で、経験した恐怖には、私が眠つて居る間に私を捕まへてくるような恐怖は何だのなんぞはとて有り得ない。それは其の性質から言つても、亦其の程度から言つても、あらゆる私の経験を超したものであつた。

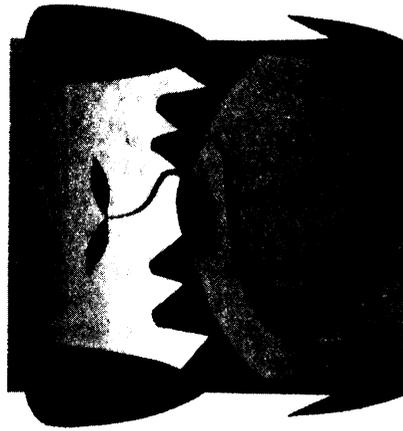
例へば——私は樹の少年、いや、むしろ樹の小僧であつたので、私は眠つては山谷を云々するのは、まだ行つて見た事無い領域だつたのだ。それにも拘らず、私は決して夢に指を見た事も無ければ、又一軒の家さへ嘗つて私の心の中にも現れて來た事は無かつた。いや、その事ならば、嘗つて一人の人間だつて私の眠りの城壁を破つて現れて來た事も無かつたのだ。此の私と云ふものは、樹木は唯公園か樹木でしか見た事は無かつたのだが、その私が夢の中では、果しもない森林の中を徘徊して居たのだ。然も其の上、斯うした夢の中では、樹々は決して唯私の幻影の上に飄々には舞るに過ぎないやうなもので無くて、くつきりと然も明瞭に現はれるのであつた。私は斯うした樹々とは全く親しい間柄であつたものだ。私はあらゆる枝葉・小枝に至るまで見て居たし、又其の葉も一枚々々に至るまで見て居つて居たものだ。

よく私は覺えて居るが、それは私が私の覺めて居る間の生活が始めて暫くの本を見た時だ。私が其の朝、其の枝、其の節々を眺めた時、私の眼に近し程鮮やかに映つた事は——その間に、樹木は既に塵埃となつて夢の中で見た事があると云ふ事であつた。で、私は其の後の生活で、樹木はたゞ、いろいろ

# 太古の呼び声

Before Adam

ジャック・ロンドン 著  
辻井栄滋 訳



平凡社



## 第一章

何としたことか、この教知ぬ場面は！ それがわかるようになるまでに、自分の見ている夢に群がるこうしたおびただしい数の場面はどこから来るのだろうか、と私は何度首をかしげたことか。そんな森の場面など、現実の目が覚めている屋間の生活ではお目にかかったこともなかったものだからだ。おかげで、わが幼年時代は極まされ、見る夢が悪夢の列と化し、しばらくすると、自分は仲間とは違ふ、不自然で呪われた者なんだ、と確信するようになった。

とにもかくにも機嫌よくしてられるのは、屋間だけだった。夜になると、目立つて恐怖に支配された——それも、本物の恐怖に！ あえて恐べておくが、私と同じくこの大地を歩くどんな人間も、同種類同程度の恐怖を経験した者などいまい。わが恐怖は、ずっと昔の恐怖であり、世界がもっと若かった頃、それも、その初期の頃にはびこっていた恐怖だった。つまり、洪鐘世

9

(大米河時代にあたる、約二百万年前から約一万年までの頃) 中期として知られる期間に、極度にはびこり広がっていた恐怖だったのである。

何を言ってるのかって？ いかにも、わが夢の中身を話をする前に、説明が必要だろう。でなければ、この私にはよくわかつていることの意味も、みなさんにはどういとおわかりにならないだろう。今これを書きながらも、あの別世界の生き物や出来事が巨大な幻となって目の前に浮かびあがってくるが、みなさんにしてみれば、さっぱりわけがわからないだろう。

みなさんにすれば、垂れ耳の友情や悪だの熱烈な誘惑、赤い目の色欲と先祖返りと言つてみたところで、どうということもあるまい。単にわけのわからない金切り声にすぎない。そして同じように、火族や樹上族の仕わざにしても、そうした大勢の群れのわけのわからぬことを早口に喋りたてる奇りあいにしても、同様のものにすぎない。絶壁にある涼しいほら穴の平穩も、一日の終わりに大勢の者が寄り集まる水飲み場も、みなさんはご存じないからだ。また、梢を渡る身を切るような朝風を受けたこともなければ、若い樹皮の甘さを口で味わうこともないからだ。

おそらくみなさんも、私がたどつたのと同じように、私の幼年時代を介して近づいてみられるほうがいだろう。少年としての私は、ほかの少年たちと何ら変わつてはいなかつた——目が覚めている間は。違つていたのは、眠っている間であつた。思ひだせるかぎり小さい頃から眠つ

ている間は恐怖だつた。夢がうれしい気味を帯びることなど、めつたになかつた。おおむね、恐怖に充ちており——それも、実に奇妙で異質な恐怖に充ちていたので、まるで量れる性質のものではなかつた。目が覚めているときに経験したどんな恐怖も、眠っているときに取りつかれる恐怖とは似ても似つかぬものだつた。性質といい種類といい、私のあらゆる体験をしのぐものであつたのだ。

たとえば、私は街の少年、というか街の子供であつたから、田舎はまだ足を踏み入れていない領域だつた。なのに、街の夢など見たことがなかつたし、およそ夢の中に家が出てくることもな



……ロンドンが自作の方が優れていると信じている。この点は同感である。『アダム以前』の不思議にも寂しい太古の世界の雰囲気は、読む人の心を捕えてやまない。ウォーターラーが平板に原始の物語を語ったのに対して、これを現代少年の夢という枠の中で展開したロンドンの方法も面白い。〈傍点筆者〉<sup>19)</sup>

『アブの物語』は人間の歴史を、『アダム以前』は人間に到達できなかった生物の一時期を描いた、という構想の基本的な違いのために、前者は前進に、後者はむしろ前進を妨害するものに光を当てているとも言えよう。<sup>20)</sup>

もう一つ、蛇足になるかも知れないが、わが国における翻訳事情についても若干触れておきたい。邦訳はこれまで3度試みられ、日の目を見ている。その最初のもは、ロンドンがまだ存命中の1916（大正5年）のことであった。奥付には6月23日発行となっている。ロンドンが死去する（11月22日）ちょうど5ヵ月前に出たわけである。訳者は篠崎彦三郎、発行所は「東京市麴町區平河町5丁目」の洛陽堂。定価は80銭とある。筆者は、これをたまたま東京の古本屋で24,000円で入手した。今から80年以上も前の稀書であり、当時の活字や文体をよく表わしていると思われる。紙幅の都合上、86%に縮小して、扉と訳者による「はしがき」と訳の冒頭3ページのみを掲げておく。

2冊めは、1932（昭和7）年に清水宣の訳で春陽堂の〈世界名作文庫〉に収められ出版されている。この原本は筆者の手もとにはないが、1991年に国立国会図書館所蔵のものをコピーで入手したものがあるので、これについても篠崎訳の場合と同じ手順で掲げてみよう。

3冊めは拙訳書である。1994年に平凡社より上梓した。清水訳から60年以上も経過していた。これについては入手が容易なので、扉と第1章の最初の3ページのみとする。

同じ原作の訳書が3種類、それも大正、昭和初期、そして平成と、3つの時代が80年以上の時を超えて顔を揃えたことになる（拙訳書も含まれるので、コメントは差し控えたい）。

### III

*Before Adam* は、全18章から成る太古の世界——数十万年ないし百万年もの大昔——に生きたわれわれ人類の祖先たちの生きざまを自在に、かと言って科学的な視点を忘れることなく活写したユニークな作品である。まず第1に挙げられる点は、太古の世界を生き生きと蘇らせ説得力を持たせるために、最初の第1・2章に夢という有効なフレームワークを用いたことである。なるほど、*John Barleycorn* (1913) という酒と冒険の自伝的物語の第1・2章でもやや難解な独特の持論を展開しているし、それについてはすでに取りあげ<sup>21)</sup>したが、*Before Adam* のような誰にもおよそ見当のつかない世界を描く場合には、とりわけ読者に対する強い説得力が必要となる。そのためにロンドンは、夢という仕掛けを導入部に用意したのである。その書きだしは、前章の終わりに掲げた訳の通りである。昼間はともかく、夜になると悪夢に苛まれたという。それも、「思いだせるかぎり小さい頃から、眠っている間は恐怖」(p.11)であった。そして、

こんなことを言うと、すでにお気づきの通り、夢の第一法則に違反してしまっている。すなわち、夢で

見るのは、目が覚めている間に見たことに限られるか、もしくは、目が覚めているときの生活で見たことを取りあわせたものというわけだ。ところが、私の夢ときたらどれも、この法則に違反していた。目が覚めているときの生活で知っているものが、何1つ出てこないのである。夢の生活と目が覚めているときの生活は、別個のものであり、私自身のほかには共通するものが1つもない。私という者がつなぎ役になって、どういうわけか両方の生活をしていたのである。(pp.12-3)

と、次第にロンドン独自の世界へと読者を引きずりこんでいく。この「つなぎ役」「両方の生活」は、さらに説明が加わって、「人格の半分裂」(p.17)や「自分の二重性」「別人格」(p.27)となる。

この私の中にいるもう1人の自分こそが祖先であり、わが種の初期の歴代の祖先の1人なのであり、このもう1人の自分にしてもまた、その時代よりずっと前に手や足の指を持つようになり木に登るようになった同族の子孫なのである。(p.28)

そして、「このもう1人の自分」という夢の中の分身が、具体的に「大<sup>ビッグ・ツース</sup>歯」と「勝手に名前をつけた」(p.51)太古の祖先というわけである。

こうした第1・2章を中心とした作品の大きなフレームワーク——とりわけ第2章の人格の半分裂——は、果たしてあり得るのだろうか？ 作者は、大学で学んだ進化論と心理学から「種の記憶」を援用している。少し長いが引いてみる。

それは、樹上生活をしていた遠い祖先にまでさかのぼる。彼らは樹上生活者だったから、とかく木から落ちやすいということがつねに脅威になっていた。多くの者が落ちて命をなくしたが、恐ろしい墜落を経験したのは全員で、助かったのは地上に向かって落ちる際に枝をつかんだ者であった。

ところで恐ろしい墜落は、そんなふうにして避けられたものの、ショックを引き起こした。そうしたショックのあまり、脳細胞の分子に変化が生じる。これらの分子の変化が、子孫の脳細胞に伝えられ、要するに種の記憶となったというわけだ。このように、読者のみなさんや私が眠っているかうとうとしていて、空間を落下して地面にぶつかる寸前に目を覚ましてむかつくような気分を覚えるとき、私たちは単に樹上生活をしていた祖先に起こったことを思い起こしているだけであり、それは脳の変化が種の遺伝形質に刻みつけてきたものなのだ。

このことに別段不思議はないし、それは本能に何ら不思議なことがないのと同じだ。本能というのは、単に習慣が私たちの遺伝の要素に刻みつけられたものにすぎない、ただそれだけのことだ。ついでに、お気づきになるだろうが、みなさんにも私にも誰にだっごくおなじみのこの墜落の夢では、ぜったいに地面にぶつかることがない。地面にぶつかれば、破滅してしまうことになる。樹上生活をしていた祖先のうちで地面にぶつかった者たちは、すぐに死んでしまった。たしかに、彼らの墜落のショックは脳細胞に伝えられたのだが、即死してしまって、子孫をつくれなかったわけだ。みなさんや私は、地面にぶつからなかった者たちの子孫であり、だから、私たちは夢の中で、ぜったいに地面にぶつからないのである。(pp.22-3)

これは、ユングの集合無意識の考え方に類似している。

すべての人類の記憶と経験がそこに蓄積されていて、それが何らかの方法で汲み出せるという説だ。（中略）ユングによれば、集合無意識とは個人的に獲得されたものではなく、人間の脳の中に集団的に受け継がれてきたものであるという。<sup>22)</sup>

また、

ウィードおよびフロレンス・ハラムの統計によると、夢の58%は不快な夢で、ほんとうに快感を伴う夢は、28.6%にすぎない。ただの不快な夢のほかに、悪夢があり、コドモはよく悪夢をみる。<sup>23)</sup>

コドモは、とくに5歳ころまでは、覚醒と夢の区別がはっきりしない。<sup>24)</sup>〈傍点筆者〉

などは、作者の記述が間違っていないことを裏付けるものである。さらに、

……多くの実験に示されるように夢の物語における時間と、夢を実際に見ている時間が非常に異なること（短時間のうちに長い夢を見られること）<sup>25)</sup>が納得される。

は、第3章の次の数行と連動するものであるだろう。

何しろ、私は連続して夢を見ることがなかった。ある瞬間にはわが樹上の巢で横になっている原始世界のちっちゃな赤ん坊のときもあれば、次の瞬間には見るも恐ろしい赤目と組みついて戦う同じ原始世界の大人であったりした。かと思うと次の瞬間には、日盛りに、用心しながら水たまりまではいおいて行くところだったりする。出来事は、原始世界では何年かおいて起こるのに、私の場合ときたら数分ないし数秒間以内に起こるのだった。（p. 32）

さらにはまた、木から墜落したり空中を落下したりする夢の話は、*Before Adam* の中でも上の引用部分のほかに再三現われるが、これについては例を挙げるまでもなく多くの人々が経験している通りである。

このように今日的視点からも、この夢という仕掛けは、*Before Adam* の効果的且つ科学的枠組みたり得ており、結果的に物語の中身そのものに相当の信憑性を付与しているものだと言えよう。けれども、これは単なる物語であり、今引いた p. 32 の夢の筋が一貫していない点とも相俟って、

何も社会学的な長談義でもないので、便宜上、種々の出来事をわかりやすい物語に組み立ててみることにしよう。夢全体を突っさる、一本筋の通った連続性なり出来事なりがあるからだ。たとえば、垂れ耳と<sup>ロン・イヤー</sup>の友情がある。また、赤目に対する憎しみや、速子との恋もある。こういったことを引くくめてまとめれば、きっとかなり首尾一貫した面白い物語になって、みなさんにも同感してもらえらるだろう。（pp. 33-4）

と断わっている。まして「夢は多義的であって、多くの異なる見方を許すことが多い」<sup>26)</sup>ものとなれば、この仕掛けを採用したことの意義は計り知れないほど大きい。芥川賞作家日野啓三氏は、

書評でこう書いている。

読み始めて最初の方では、少年時代毎夜のようにみた夢、という虚構の枠組みの中で、百万年か五十年ほど前の初期人類の生活を書いた空想小説という気がしたけれど、読み進むうちに、彼は本当にこんな夢をみ続けたのではないか、と思われてきて、自分のことのように濃密に<sup>うな</sup>魔され骨身に恐怖し、異様な現実感を覚えた。<sup>27)</sup>

次に注目すべき点は、一見単純そうに見える原始社会に生きる大勢の原人たちのなかで、主人公役を務める大<sup>ビッグ・ツース</sup>歯をはじめとする多彩な顔ぶれが配置され、それぞれに特異な名前がつけられ、さらには性格や特長まで描きこまれている点である。たとえば大歯は、すでに引いた箇所でもわかるが、「私の夢の中のもう1人の自分であり有史以前の祖である」(p. 139)。「わが夢の仲立ちがあってこそ、この現代人の私が大歯の目を通して眺めている」(p. 139)というわけだ。無論、

当時は誰も名前など持っていなかった、つまり、名前では知られてはいなかった。便宜上、親しく接していた一族のいろいろな者たちに私が勝手に名前をつけたのであり、「お喋り」というのにしても、このご立派なわが義父に対しこれ以上見つからない似つかわしい呼び名なのだ。私はどうかと言えば、自分で<sup>ビッグ・ツース</sup>「大歯」という名をつけた。私の犬歯が、目立って大きかったからだ。(p. 51)

としている。ロンドンとは題名ばかりか、登場人物の名前のつけ方まで巧みである。それは『野性の呼び声』や『白牙』といった代表作でも実証済みだが、*Before Adam*においてもよく証明されている。その辺にライトをあててみよう。

「人類はサルと祖先を共にする<sup>28)</sup>」が、「サルの祖先から類人猿がいつ、どこで分かれたかは不明である<sup>29)</sup>」という。ただ、

霊長類に共通する特性は、樹上生活に適した能力をもっていることである。(中略)霊長類の中で、樹上生活を完全に捨て、地上生活に適応し、繁栄した種はヒトだけである。<sup>30)</sup>

とすると、*Before Adam* では Tree People (樹上族)、The Folk (穴居族)、そして Fire People (火族) の3タイプの原人が登場する。この3タイプが、いわば横並びの形で同時平行的に登場することは、現在では科学的には不正確であるようだが、読者の側からすれば、人類の進化が手ぎわよくパターン化されているので、それらの呼び名も手伝って手に取るように理解しやすいのは確かである。これら3タイプは、上掲の順に進化の度合いが増している。従って、サルから樹上族へと進化していったわけだが、樹上族と穴居族(これが大歯の属しているグループ)の間にはさほど大きな相違はない。ただ、

The Folk have taken to living in caves carrying water in gourds, and other more “civilized” activities. The Folk, who are youthful and simple in their existence, have little sense of community even though they live very close together.<sup>32)</sup>

とあるように、ヒョウタンに水を入れて運ぶといったより開化された諸活動を始めているが、共同生活というものが確立できていない。「協力しようとの衝動」（p.179）は感じて、語彙不足で表現する術がないのだ。ところが火族になると、大変な進化を見せている。Earle Labor 教授は“the advanced Fire People (*homo sapiens*)”<sup>33)</sup>としているが、*homo sapiens* はラテン語で“wise man”の意であり、まさにわれわれ近・現代人へと通ずる数多くの強みをすでに持っている。初めて登場するのは、第7章である。

……はじめて<sup>ファイアマン</sup>火人を見た。彼は、こっそりと地上をはうように進んできて、木をのぞくように見上げている。最初私は、野獣だと思った。腰のまわりから肩にかけて、1枚のぼろぼろの熊の毛皮をまとっていたからだ。それから、その手と足、それに、もっとはっきりとその顔立ちが見えた。私の同類にひじょうによく似ているが、ただ、彼のほうが毛深くなく、足も、われわれの足が手と似ているのに比べると、手とは似ていない。実は、のちに知ることになるのだが、彼とその種族はわれわれよりはるかに毛が少ないが、逆にわれわれは、それと同じく、樹上族よりも毛が少ないのだ。（pp.89-90）

をはじめあちこちで、体軀や顔つき、毛の生え具合等々がきわめて具体的且つ克明に描かれており、3タイプの違いがよくわかる。いちいち引用はしないが、たとえば「私の母親」（p.37）、「私の父」（pp.39-41）、「身のこなし」（p.50）、「後述する「赤目」という先祖返りの外観（pp.64-6）、「同じく火族の外観（p.164）などで、特長が詳細に描きこまれている。ただ、

全体として見れば、彼らとわれわれとの違いは、われわれと樹上族との違いより少ない。間違いなく、3種族はみな関係があり、それもそんなに縁遠いわけではなかった。（pp.164-5）

としている。

樹上族や穴居族の進化が遅々としており、時にまどろこしさすら覚えさせられるのに対し、火族のそれは他の2タイプの比ではない。まずは何と言ってもその呼び名の通り、「……太古、人類が人類として生まれて最初に起こした「猿以上」の知能行動は、火をつかうことではなかったか<sup>34)</sup>」といった素朴な推測にもある、火の使用が他の2タイプを突き放す。これに次ぐのが弓矢の使用で、この2種類が他の2タイプ、とりわけ The Folk を駆逐し絶滅の危機に追いやるのである。その他、すでに見た「ぼろぼろの熊の毛皮をまとっていた」（p.89）り、「ヒョウタン」は言うに及ばず「何らかの料理」（p.171）までやっているらしく、「本物の筏舟」（p.172）や丸木舟（p.232）といったものも作っているし、知的レベルでいえば、「言葉を持っていて、もっと効果的に物ごとを理屈で考えられたし、さらに、協力ということもわかっていた」（p.194）。加えて「秩序や策」（p.214）があり、火をおこして煙で穴居族を「いぶし出」（p.216）すことまでやってのけるのである。

今、原人の3タイプの呼び名とそれぞれの特長について整理してみたが、もう1匹というかもう1人というか<sup>レッド・アイ</sup>赤目の存在も無視できない。赤目は、先祖返りの嫌われ者である。何しろ、

どの点から言っても怪物であった。肉体的には巨人であり、170ポンドはあったにちがいない。われわれと同類の者の中でこいつほど大きなやつは、見たことがなかった。火族の中にも、また樹上族の中にも、

赤目ほど大きなやつを見たことがない。(p. 64)

という、「他に類を見ないほどの先祖返り」(p. 66)で、

われわれは、樹上生活から地上生活へと変わっていく途中の段階にあった。何世代にもわたってこうした変化を経る中で、われわれの体や身のこなしも同じように変化してきた。ところが赤目ときたら、もっと原始的な樹上生活の類型に逆もどりしてしまっている (p. 66)

のである。しかしながら皮肉なことに、進化の流れに逆行する赤目の暴虐は、この物語の進行を単調にはせず、荒々しさ・恐怖感・臨場感といったものをふんだんに与える役割を果たしている。原始時代の餓鬼大将、悪役、独裁者であり、その横暴ぶりを描く場面は随所に見られるが、*The Folk* にとっては、この赤目の残忍性と火族が恐怖の的なのだ。

このほかにも、多彩な人物が登場する。大歯の父母、<sup>ロップ・イヤ</sup>垂れ耳、<sup>ブローケン・ツース</sup>折れ歯、<sup>マロウ・ボーン</sup>老髓骨とその息子の<sup>ヘアレス・ワン</sup>毛なし、またさらにその息子の<sup>ロング・リップ</sup>長口、大歯と結ばれる<sup>スウィフト・ワン</sup>速子、毛なしの娘の<sup>シンギング・ワン</sup>歌うたいとその連れあいの<sup>クルキッド・ワン</sup>がに股、<sup>ビッグ・フェイス</sup>大顔、<sup>ヘア・フェイス</sup>毛顔等、それぞれに適したネイミングをもたらした人物たちが、役どころの大小にかかわらず味のある役を演じている。さらには、原人たちのほかにも様々な動物が登場し、この原始社会を賑やかで動的なものにするのにひと役もふた役も買っている。猪、<sup>サーベル・ツース</sup>猛歯という老虎、トカゲ、蛇、3匹の子犬、ハイエナ、半人前の子牛、ライオンの雄と雌、犀、野生の犬、錦蛇等々、その種類と数には事欠かない。上記の登場人物たちとともに、どれほどこの作品が厚みと奥行きを増す力になっていることだろう。別の短篇“Love of Life”（「生命にしがみついて」）のストーリーの動物たちと同様、単調さを救ってみせている。

3つめに注目すべきは、原始社会が闇と音に満ち満ちていて、音が闇の恐怖を際立たせ、逆に闇が音の増幅効果を生んでもいる点である。われわれ現代文明人は特に、騒音に囲まれた感の生活を送っている。ところが、原始世界は闇と静寂に支配されていた。それだけに、闇は恐怖感を煽り、音はその恐怖感を募らせた。

ああ、あの果てしない森、そして、恐怖がついて離れない森のうす暗闇！ どれほど長い間、臆病な狩り立てられる生き物みたいに、そうした森の中をさまよったことだろう——<sup>ちよっとした物音</sup>にもびくつき、自分の影にもおびえ、緊張し、たえず油断なく気を配り、いざとなればすぐさま死にもの狂いで一目散に逃げだす態勢が整っていた。何しろ私は、森に住むあらゆる獰猛な生き物の獲物であったし、恐ろしさのあまりにもう我を忘れて、獲物をあさる怪物のような生き物から逃げまわっていたのだから。(pp. 14-5) <傍点筆者>

このたそがれ時よりも遅い時間におらつくような勇氣はない。恐ろしい暗闇が迫りきているからであり、そういう暗闇では、世界は肉食獣の大虐殺に委ねられ、その間この人類の先人たちは、震えながら自分たちの穴に身を隠すのだ。(p. 114)

このほかにも、いくつもの例 (p. 129, p. 183 等) を挙げることができる。この闇に潜んで、上に挙げた肉食獣たちが虎視眈々と獲物を狙っているわけだ。

この闇への恐怖を増幅させるものが、様々な音である。全篇を通して闇を打ち破る音が続く。ガラガラ、ブーブー、カーカーノをはじめ、ドシーン、ガーン、メキメキッ、バリバリッ、ピュン、……といった音である。音は、必ずしも闇を破るものばかりではない。原人たちの声音もあれば、「サラサラと鳴る木の葉」（pp.88-9, p.197）まで、多種多様だ。次のような迫力に富む音も結構ある。大歯が垂れ耳と沼地で丸木に乗って遊んでいる時に、赤目に見つかり、石を投げつけられる場面である。

ピューッ！ 小石が弾丸と言ってもいい勢いで飛んできた。垂れ耳と私は、がむしゃらに漕ぎだす。ピューッ、ピューッ、ガツン！ 垂れ耳が、突然の激痛に悲鳴をあげる。小石が、彼の両肩の間にあたったのだ。（pp.145-6）

こうした音が40ヵ所ばかりにちりばめられて、作品に躍動感を与えている。従って、あたり一帯が静まり返っていればいるほど、その効果は大となる。それは、今日の世界、たとえば大自然の残るカナダ北西部のクロンダイク地方を舞台にしたロンドンの極北ものにおいても多々活かされている。その最たるものは、“Law of Life”（「生の掟」）であろう。

4つめは、巧みな storyteller としての力量、とりわけ具体的な描写力に目を見張らされる点である。すでに2つめ、3つめで引用した箇所からもそれは窺えるが、そのほかにも絵画的と言おうか、映像を見ているような鮮やかなスケッチに何度も驚かされる。樫の木をはじめとする種々の木（p.12）、香りまで運んできそうなブルーベリー（p.13）。あるいは、次の蛇の描写などはどうだろう。

蛇？ そんなものがあることを聞くずっと前から、眠っているときにそいつに悩まされていた。森の中の空き地で私を待ち伏せ、私の足もとから跳びあがって、攻撃してきたり、乾いた草の間やむき出しの岩場をのたくり越えていく。かと思うと、幹にその大きな光る体を巻きつけながら、揺れ動いてはバチバチッと音を立てる枝を伝ってどンドン上の先のほうまで私を追いやり、梢まで追いつめる。下の地面ときたら、目がくらむばかりに遠く離れている。蛇ノ——あの叉状に分かれた舌や、小さく丸く輝く目や、ぎらぎら光る鱗こけらを持ち、シューッという音やガラガラという音を立てる——蛇つかいが蛇を持ち上げるのを見た、あのはじめてサーカスに行った日にも、蛇のことはすでに十二分によく知っていたのではないだろうか？ 蛇は、私の古い友だち、いや敵であり、夜ごと恐ろしく夢の中にぞろぞろと出てきたのだった。（pp.13-4）

ひじょうに的確であり、読者は鮮明に蛇をイメージすることができる。もう1つ、こんなのはどうか。大歯と垂れ耳がほら穴にもどれなくて、木の高い叉のところで夜を過ごす。

それは、みじめな夜だった。最初の数時間というもの、ひどい雨が降り、それから冷えこんで、冷たい風が2人に吹きつけた。ずぶ濡れになり、体をぶるぶる震わせ、歯をガタガタいわせながら、2人は抱きあってちこまっていた。（p.129）

「あらゆる恐怖を身に感じる夜」と雨と冷たい風に苛まれる様子は、真に迫る。この場面などは、*The Road* の「夜を走るルンペンたち」に記されている「カウンスル・ブラッフスの巡回酒場で

スウェーデン人と過ごしたあの夜ほどつらい野営をし、みじめな夜を過ごしたことは断じてない」<sup>35)</sup>に続く苦しい体験が活かされているに違いない。また、登場人物たちが軽々と木々を渡っていったり、あるいは落下していくさまの描写なども、特筆すべきものであるだろう。ダイナミックで、エネルギーで、読者は彼らとの一体感を覚えずにはいられない。

5番めと6番めと7番めについては、これまでもロンドンの別の作品を論じた際に取りあげたことがあるので、詳論する必要はないと思う。比喻とイラスト写真の効用および特有の表現である。比喻だけでも、ざっと数えて30ヵ所ほどにのぼる。めばしいのをいくつか拾ってみると、

われわれが動物を煮炊きして食べるようになるに至る進化は、しっかりと巻かれた未来の巻き物の中にあった。(pp. 111-2)

私は、ちょうど馬がこわいものにおびえてしりごみするように、矢におびえてしりごみしていたにちがいない。(p. 190)

……枝を前後に揺さぶると、ついには、誰かがむち先でハエを追い散らすように、速子を追い落とした。(p. 207)

赤目はうまい具合に棍棒をつかむと、連中の頭をまるで卵の殻のように殴り砕きはじめる。(p. 224)

それは、この世の末日のあとに生き残った少数の者たちの集まりみたいである。(p. 228)

生きているというよりも死んだ状態にあり、単にうろつきまわる骸骨にすぎなかった……。 (p. 230)

<いずれの傍点も筆者>

といったあたりであろうか。他の多くの比喻ともども、作品の流れを澁みなくするうえで効果大なるものがある。

6番めのイラストだが、ロンドンが書いた想像を絶するどのストーリーにも共通しており、その程度が大きければ大きいほどイラストの数も増える。*The Road*の場合にはすべて1ページ大で48枚も使用しているが、*Before Adam*では口絵と1ページ大のものが8枚、その他半ページ大を含む小さなものが50枚にも及ぶ。このうち赤目(1ページ大)と速子(1/4ページ大)のものを原寸大で掲げておく。この作品の大方を想像力に依存しなければならない読者にとって、これらのイラスト(Charles Livingston Bullによる)が作品理解の大きな一助になることは疑うべくもない。

最後に特有の表現だが、想像を絶する体験なり物語なりを綴る際にロンドンがよく用いる表現である。それらは、*The Road*を取りあげた際にも言及した。「あまり覚えていない」(p. 34), 「うまく説明できない」(p. 39), 「知りようがない」(p. 48), 「私にはわからない」(p. 74), 「見当もつかない」(p. 151), 「今もはっきりと覚えているのは」(p. 190), 「特に記憶に残っているのは」(p. 213)といった類いの表現が、実に40ヵ所にも散見できるのである。無定見でいい加減なようにも映るが、その実夢に見た太古の物語が現実味を帯びるし、また、出来事と出来事をうまくつなぐ役割を担っていてもいいと言えよう。



以上、*Before Adam* の特徴を7点ばかり取りあげて検討を加えてみたが、それらは、作品の舞台設定や登場人物の配置がきわめて困難であるにもかかわらず、全体として現代の読者が幾千幾万世代を超えて原始社会まで十分見通せられるだけの巧妙な仕掛けであり、工夫の数々なのである。

#### IV

現代人の目から見れば、単純稚拙きわまりない太古の祖先たちの行動だが、そこにはまた幾千幾万世代を下って今日の多様な人間社会の兆しも見事なまでに見え隠れしている。本章ではそれらを拾いだし、そこからどんなメッセージが読みとれるのかを追究してみたい。

*Before Adam* は、これがほんとに原始社会なのか?と思えるほど、現代文明人の抱える問題を数多く内包している。人間の性向や行動様式や人間社会の有りよう等が、何万年何十万年を経てもさほど大きく変容するわけでもないことに気づかされるのである。たとえば、順を追って見ていくと、まず義父との不仲に絡む「家庭内騒動」(p.51)がある。これと関連して、虐待(p.53)が暴力が頻々と起きる。虐待は、赤目が連れあいに対しても再三起こす。

赤目は、連れあいを殺害するだけでなく、あらたな連れあいを手に入れるためにも、人殺しに及んだ。あらたな連れあいが欲しくなって、ほかの男の連れあいを選ぶと、さっそくその男を殺した。(p.116)

赤目の暴力の対象は、誰かれなしである(pp.121-2の2歳の子供に対して、p.122の老髓骨に対して等)。前章でも取りあげた、赤目が石を投げつける場面(pp.144-7)などの暴力の例には事欠かない。

この冬の間、赤目は一番新しい連れあいを虐待し、くり返し打ちすえることによって殺してしまった。やつのことを先祖返りと呼んできたが、この一件では先祖返り以上にひどかった。何しろ、下等動物の雄でもその連れあいを虐待して殺したりはしないからだ。この点で赤目というのは、いくら恐るべき先祖返りの傾向があるとはいえ、人間の出現を予示していたと思う。何ととっても、連れあいを殺害するのは、人類の男だけなのだから。(p.178)〈傍点筆者〉

この辺になると、作者の考えが明確に見てとれる。ことあとも、暴力死(p.192)や火族による「見境のない虐待」「皆殺し」(共にp.221)と続く。あらゆる暴力の否定が現代民主主義社会の大前提となっはいるものの、現実はどうであろう。たかだかここ2千年ほどの人間の歴史を紐解いても、血塗られた戦争の連続であった。規模から言えば、大歯の時代とは比較にならない。たとえ

この一族の者で老齢までは生きてたためしが無い。中年でもかなりまれなことだ。暴力による死というのが、普通の死に方であった。(p.192)

にせよである。治安が良いことでは世界でなお有数の今日のわが国においても、殺人や傷害事件は毎日のように起こっている。

結婚や一夫一婦制についても多少見解が述べられている。

……結婚はまだ未熟な状態にあり、夫婦はけんかをすると別れる癖があったのだ。近代人も、離婚制度やらがあって、法的には同じことをやっている。けれども、われわれには法律などなかった。何でも習慣によっていたのであり、その習慣ときたら、こと結婚に限っては、相当にでたらめだったわけである。(p. 81)

にはアイロニーも込められている。人数が桁違いだから、便宜上法律や制度が整備されてきたわけで、その内情は大きく変わったのではないようなのである。

もう1つ、利他主義と友愛の問題が目を引く。大歯が右脚に矢を貫通され、うずくまっている場面だが、垂れ耳は大歯を置いてきぼりにはしない。

いくらこわくとも私のそばにとどまっている彼の行為こそ、私が利他主義と友愛の徴候と考えるものであって、それが人間を動物の中で最強の者たらしめるのにひと役買ったものなのである。(p. 94)

と捉え、矢の軸を歯でかじりだす垂れ耳の行為を

私は、この光景をつくづくと考えることがよくある——われわれ2人は、種の幼年期にあって、まだ半人前の若僧でありながら、2人のうちの1人は、もう1人のそばにいて救おうと、自分の恐怖に打ち勝ち、逃げたいという自分勝手な衝動を打ち負かしているわけだ。すると、そこで予示されたあらゆるものが、私の眼前に立ち現われる。(p. 95)

と述べ、「予示されたあらゆるもの」の例がこのあとに挙げられているが、その予示の当否はともかく、悠久の時を超えて読者を大歯・垂れ耳と彼ら「特に道徳的に優れた才幹を示した人たち」(p. 95)とを結びつけるとは、何と遠大で想像力に富んだ一節であろうか。

矢と言えば、武器の進化も窺える。最初は両手か足を使っての攻撃でしかなかったのが、ゆっくりとした進化（作者は、人類の進化には気の遠くなるほどの時間の経過があったことを各所で主張している——たとえば、p. 101）のうちに、石や棒切れ、やがては火族のように弓矢や火まで武器とするようになった。さらには、より殺傷能力の高い武器が考案され続け、ついには今日の大量殺戮兵器を持つに至る流れまでが見通せるようである。

このほかにも、現代人の持つ様々な問題点や事象の源流を垣間見ることができる。一族のみなが北東という方位を恐れたこと (p. 81, p. 98) は、家相と関連して今日まで根強く残っているし、垂れ耳がひとつかみの青葉を大歯の傷口に詰めこんで止血した話 (p. 96) は、今日の医療の先駆けとなる行為であるし、水の蓄えにヒョウタンを利用したのは老髓骨の高齢からきた工夫だが、これなどは今日の日本をはじめとする先進諸国の高齢化の社会問題そのものを喚起するものであるだろう。また、漁師第1号や航海術の第1歩である最も原始的な筏 (p. 133)。一族の乱痴気会合なるものについては、「原始人の寄りあいや、後世の人類の大きな国民会議を予示するも

のであった」(p. 181)との明言にある今日の国会や集会の野次や怒号を想起させるものだろうし、暗闇の恐怖に絡む霊界——宗教 (p. 183), 恐妻家 (p. 189) 等々、どれも現代の読者を首肯させるに足る事象ばかりである。今日の諸問題も跡を辿ればそのほとんどが太古の原始世界に端を発していることを、これでもかこれでもかと言わんばかりに取りあげてみせる。“London does achieve a re-examination of modern behavior in light of man’s past.”<sup>36)</sup>といった同様の見解もある。

筋が通らず愚かであったが故に進歩は遅々としたものではあったが、人類には他の動物にはない旺盛な「好奇心と鋭敏な感知力」(p. 101)があり、これに偶然 (p. 158, p. 211)も加わって、様々な発見と自らの生き残りを可能にした。だが、その一方で、今日の様々な世界的危機状況を見るにつけ、幾万年幾十年をかけて培いため込んできた人類の力量が果たして進歩の名に値するものであったのか、と首をかしげたくなるような現象や事件が多発していることもまた事実である。*Before Adam*に即していくつか考察してみると、まず、文明人は足腰や歯が弱くなったことが挙げられる。

太古、原始人は自分の歯で生肉や骨や木の実をばりばりとかみ砕いた。文明が進んで、火を通し、二重にも三重にも調理の手を加えた軟らかい食べ物しか口にしなくなった今、人間のあごや歯は退化し、顔つきは細面のやさ姿に変わっていった。反面、口も腸も、野生の硬い食べ物を受け付けることができなくなった。<sup>37)</sup>

の1文などは、現代文明人の脆弱さを突いており、*Before Adam*の発するメッセージの1つとして重ねることができるだろう。また赤目は、先祖返りで野蛮きわまりない、ともっぱら悪人扱いされがちだが、

数年前、マンションの上から2人の小学生が消火器を落し、それが下を歩いていた少女にぶつかって即死する、という痛ましい事件があった。消火器を投げ捨てたこの少年らはごく普通の子供たちだったそうだが、おそらくこの2人は今まで1度も木に登ったことがないのだろう。木に登って落ちたという経験がないのである。むかしの子供たちはたいてい木に登るか、あるいはそれに近い遊びをして痛みを知る。それが大人になってから感覚のバランスをつくる重要な学習だった。

いまの日本の子供をめぐる超過保護社会は、子供らにリスクを求めない分なにか途方もない精神のゆがみをそこに発生させてしまっている。<sup>38)</sup>

といった現代の様子とダブらせると、必ずしも釈然とはしない。

Red-Eye, we learn, in not toally an animalistic throwback, but is equally a portent of civilized man:<sup>39)</sup>

文明人の前兆でもある、というわけだ。とりわけ現代民主主義社会では暴力はご法度になっているはずであるのに、<sup>40)</sup>爆弾テロや無差別殺人、ハイジャック等々が頻発しており、わが国でも連鎖反動的に事件が日々起きている。

3つめに、樹上族や穴居族をアメリカ先住民、火族を白人移民として読み替え可能なのではないか、という点である。Eiseley教授が上掲書 (p. 153)で指摘するように、火族を“a spreading

pitiless horror disturbing the ancient balance of nature”（「古代の自然の均衡を乱し勢力を伸ばしてゆく冷酷な恐怖」）だとすれば、この読み替えもあながち的はずれとは言えまい。異なるのはつねに、時代が下るにつれ、規模や数が桁違いに増大していった点だけである。強者が弱者を駆逐していく弱肉強食の論理である。ただ、その論理を肯定するよりはむしろ、そうであったであろう状況を淡々と描写しており、人類の進化には膨大な時とエネルギーを要したにもかかわらず、その個人・集団・社会の有りようには大本のところで大きな変化が見られないという批判ないしはメッセージが込められているように思われる。

## V

“civilize”を手もとの英英辞書（*Idiomatic and Syntactic English Dictionary*）で引くと、“bring out from a savage and ignorant state”とある。『GENIUS 英和辞典』によれば、

1. <未開人(種)など>を文明化する、教化する、啓蒙する
2. 礼儀正しくさせる (make more polite)

である。が、*Before Adam* を読み進めながらこれらの定義に接すると、「文明化」とか「polite」の真の意味の難しさにつかる。先の Blackman, Jr. はこうも言っている。

Civilization may have its obvious advantages, but London warns us of the inherent disadvantages. The prolonging of life through more civilized customs produces a weak group of people who cannot defend themselves and who need to be cared for. Civilization also brings technologies of war through which man is better able to kill his fellow man. The comforts of civilization such as fire can be both a friend to man by helping him cook and stay warm or it can be a foe to man by helping his enemies flush him from shelter.<sup>41)</sup>

つまり、文明の功罪が表出してくるのである。火が有用にもなれば、敵にもなり得るわけで、*Before Adam* の場合ロンドンが、火固有の不利益点をわれわれに警告しているのだという。たとえば、人間は排泄時に紙で尻を拭くが、これなど

排泄の自己完結性という点で人間はいちじるしく劣っている……（中略）……人間が尻を拭くのに紙をつかうようになったのはたかだかこの1世紀ぐらいのこと……（中略）……来世紀の中ごろまでに地球の地下資源はついに枯渇するらしい。……（中略）……このロールペーパーこそ人類百万年文明の誤った発達のシンボルであるのかもしれない……<sup>42)</sup>

といった推論を拾い読みしても、決して一笑に付せない別の「罪」が顔をのぞかせる。

すでに見たように、今日の学問の見地からすれば、確かに *Before Adam* にはいくつかの問題点や疑問点が見出されるだろう。当然のことながら当時の進化論以上の水準を超えてはいないが、

逆に言えば、当時の水準に到達するほどの妥当性・正確性を有していたわけである。本稿では、生物学的、人類学的誤謬を云々するよりも、作品として物語として現代文明批評的視点から *Before Adam* が発する問題点やメッセージを検討することのほうに力点を置き、そのことのほうにはるかに大きな意義があると考えた。中田幸子氏も書いている。

時代の理論を題材に、これを物語化して、進化論など知らない人々をも含めて一般読者に受け入れられる面白い読物を書いたことは、ロンドンがなした意義ある仕事の1つである。<sup>44)</sup>

と。きつこうであったらうと読者を首肯させるに足る事象を1つ1つ丹念に書きこむ力、しかも、これほどリアルに、ヴィジュアルに、想像力豊かにわれらの祖先、それも百万年前の原始の世界を描きあげる力を見せつけた作品は、他にあまり類を見ないだろう。先の日野啓三氏が「いま読んででも少しも古くも幼稚でもないことに驚く」と言うが、*Before Adam* が書かれてたかだか90年余り。現代世界を描いた作品なら、10年も経たないうちに古びてしまうのかも知れないが、何ととっても百万年。そんな太古の世界に向きあうとなれば、現在であろうと百年前であろうと大差はあるまい。*Before Adam* は、ここ百年、数十年間に見る現代文明の拙速と、それがもたらした環境問題をはじめとする深刻な諸問題に対して鋭い警鐘を打ち鳴らしていると言えるのではないだろうか。いずれにせよ、「本の大きな役割というのは、この「異なる空間に人をいざなう」<sup>45)</sup> ことにある」のだとすれば、それは *Before Adam* にもそのままそっくり該当し、その重責を十分に果たした作品ではあるだろう。(1998. 9. 15.)

## 注

- 1) 京都新聞, 1982年5月19日, p. 7.
- 2) Jack London, *Before Adam* (本の友社復刻版 *THE WORKS OF JACK LONDON*, Vol. 9, 1989), p. 21. 邦訳は、拙訳書『太古の呼び声』(平凡社, 1989), p. 30. 以下、本訳書からの引用はすべて、引用文(語句)のあとにページ数をもって示すこととする。
- 3) 椎名誠「科学はキライド」(岩波書店『図書』第587号, 1993年3月号), p. 43.
- 4) 『小学館ランダムハウス英和大辞典』(小学館, 1994), p. 2079.
- 5) 千葉康則著『動物行動から人間行動へ』([1974], 培風館, 1985), p. 24.
- 6) Irving Stone, *Jack London, Sailor on Horseback* (New York: Doubleday, 1938), p. 223. 邦訳は、橋本福夫訳『馬に乗った水夫』(早川書房, 1968), p. 229.
- 7) *Selected Science Fiction & Fantasy Stories - JACK LONDON*, annotated by Dick Weideman (Georgia: Fictioneer Books, 1978), p. 13.
- 8) *Jack London Echoes*, Vol. 3, No. 2 (South Carolina: The Ponderosa Press, 1983), p. 8.
- 9) George Orwell, "Forces Educational Broadcast "Jack London"" (*Jack London Newsletter*, Vol. 11, Nos. 2-3, 1978), p. 40.
- 10) Richard Weideman, "JACK LONDON: MASTER OF SCIENCE FICTION" (*The London Collector*, No. 2, 1971), p. 18.
- 11) *Letters from Jack London*, edited by King Hendricks and Irving Shepard (New York: Odyssey Press, 1965), p. 327.
- 12) Russ Kingman, *Jack London: A Definitive Chronology* (California: David Rejl, 1992), p. 64.
- 13) *The Letters of Jack London*, Vol. Two, edited by Earle Labor, Robert C. Leitz, III, and I. Milo

- Shepard (Stanford University Press, 1988), p. 585.
- 14) *Ibid.*, p. 579.
  - 15) Irving Stone, *op. cit.*, p. 223. 同上訳, pp. 229-230.
  - 16) Russ Kingman, *A Pictorial Life of Jack London* (New York: Crown Publishers, 1979), p. 166.  
邦訳は、拙訳書『地球を駆けぬけたカリフォルニア作家』（本の友社、1989）、p. 303.
  - 17) *Letters form Jack London*, p. 214.
  - 18) *Ibid.*, p. 229.
  - 19) 中田幸子著『ジャック・ロンドンとその周辺』（北星堂、1981）、p. 71.
  - 20) 同上, p. 77.
  - 21) 拙稿「J. London, *John Barleycorn*——酒と冒険の自伝的物語——を読む」（『立命館言語文化研究』第6巻第4号、1995）、pp. 162-6 参照。
  - 22) Brian L. Weiss, M. D. 著、山川紘矢・亜希子訳『前世療法』（PHP 研究所、1994）、p. 122.
  - 23) 宮城音弥著『夢』第2版（〔1972〕、岩波新書、1995）、p. 109. 本書にはこのほかにも、「フロイトも、ラマルク説にしたがって、ある経験をくりかえすときは、これが遺伝して思考、感情、行為に特別の性質をあたえると考えたが、ユングは、これをさらに発展させ、われわれの心のなかには、祖先の考え方や観念が残っていると主張した」（p. 68）といった考え方も見あたる。
  - 24) 同上, p. 187.
  - 25) 河合隼雄著『ユング心理学入門』（〔1967〕、培風館、1997）、p. 152.
  - 26) 同上, p. 179.
  - 27) 読売新聞、1994年12月13日、p. 21.
  - 28) 千葉康則、上掲書、p. 106.
  - 29) 同上, p. 105.
  - 30) 同上, p. 101.
  - 31) Elaine Ware, “Jack London’s *Before Adam*: Social Criticism in the Guise of Fantasy” (*Jack London Newsletter*, Vol. 19, No. 3, 1986), p. 113.
  - 32) Gordon N. Blackman, Jr., “Jack London: Visionary Realist Part II” (*Jack London Newsletter*, Vol. 14, No. 1, 1981), p. 8.
  - 33) Earle Labor, *Jack London* (New York: Twayne Publishers, 1974), p. 107.
  - 34) 椎名誠「しゃがんで何をする」（『図書』第573号、1997年2月）、p. 39.
  - 35) Jack London, *The Road*（本の友社復刻版 *THE WORKS OF JACK LONDON*, Vol. 11, 1989）、p. 149. 邦訳は、拙訳書『アメリカ浮浪記』（新樹社、1992）、p. 158.
  - 36) Elaine Ware, *op. cit.*, p. 113.
  - 37) 森脇逸男著『書く技術』（創元社、1995）、p. 143.
  - 38) 椎名誠、上掲誌、p. 40.
  - 39) Jon Pankake, “Jack London’s Wild Man: The Broken Myths of *Before Adam* (Purdue University: *Modern Fiction Studies*, Vol. 22, No. 1, 1976), p. 45.
  - 40) 最新のものは、1998年8月16日に北アイルランドで起きたもので、28人が死亡している。（京都新聞、1998年8月17日付）
  - 41) Gordon N. Blackman, Jr., *op. cit.*, p. 8.
  - 42) 椎名誠、同上誌、p. 42.
  - 43) Eiseley 教授は、前述の1962年版 *Before Adam* の Epilogue で、“If it is not now entirely acceptable, one must remember it was proper scientific theory in London’s own time.” と記している。
  - 44) 中田幸子、上掲書、p. 64.
  - 45) 朝日新聞、1994年7月10日、p. 22.（コンラート・シュピンドラー著、畔上司訳『5000年前の男』（文藝春秋、1994）の中島梓評）

付記：「水のたくわえにヒョウタンを利用する」(p.100)話が出てきたが、実は本稿の下書きを終えた日に奇しくも新聞に次のような記事が載ったので、紹介しておきたい。ヒョウタン1つを例にとっても、その改良には計り知れない時間と労力がかかっていることがわかる。「富山県立山町の民芸品店「立山ひょうたん社」(高村長太郎社長)はこのほど、ヒョウタン独特の強いにおいを消す技術を開発した。料理皿やとっくりなどさまざまな食器に加工して売り出したところ好評だ。同社によると、中身を取り出して乾燥させただけのヒョウタンでは、水気の多い食品を長時間入れておくと皮の臭みが付いてしまうため、これまで食器にはあまり適さなかったという。高村社長は、独自に工夫した水溶液に丹念に漬けることで脱臭に成功。さらに内側をきれいに削り出し、漆などで表面加工して食器として活用する道を開いた。……」(京都新聞、1998年9月7日、p.10.)